

冷戦がクレムリンに教えた「真実の支配」の手法

ソ連崩壊から数十年が過ぎた今、モスクワによる心と思想をめぐる闘いは終わっておらず、ただデジタルな姿に変えて続けられているのだ。



5月15日、モスクワの土産物店で、ウラジーミル・プーチン氏の肖像とソ連の紋章がプリントされたTシャツが販売されていた。
[アレクサンドル・ネメノフ/AFP]

オルハ・チェピル | 2025-06-19

Published: オルハ・チェピル. (2025, June 19). 冷戦がクレムリンに教えた「真実の支配」の手法. Global Watch. URL: <https://globalwatch.info/ja/articles/gc7/features/2025/06/19/feature-02/冷戦がクレムリンに教えた「真実の支配」の手法>

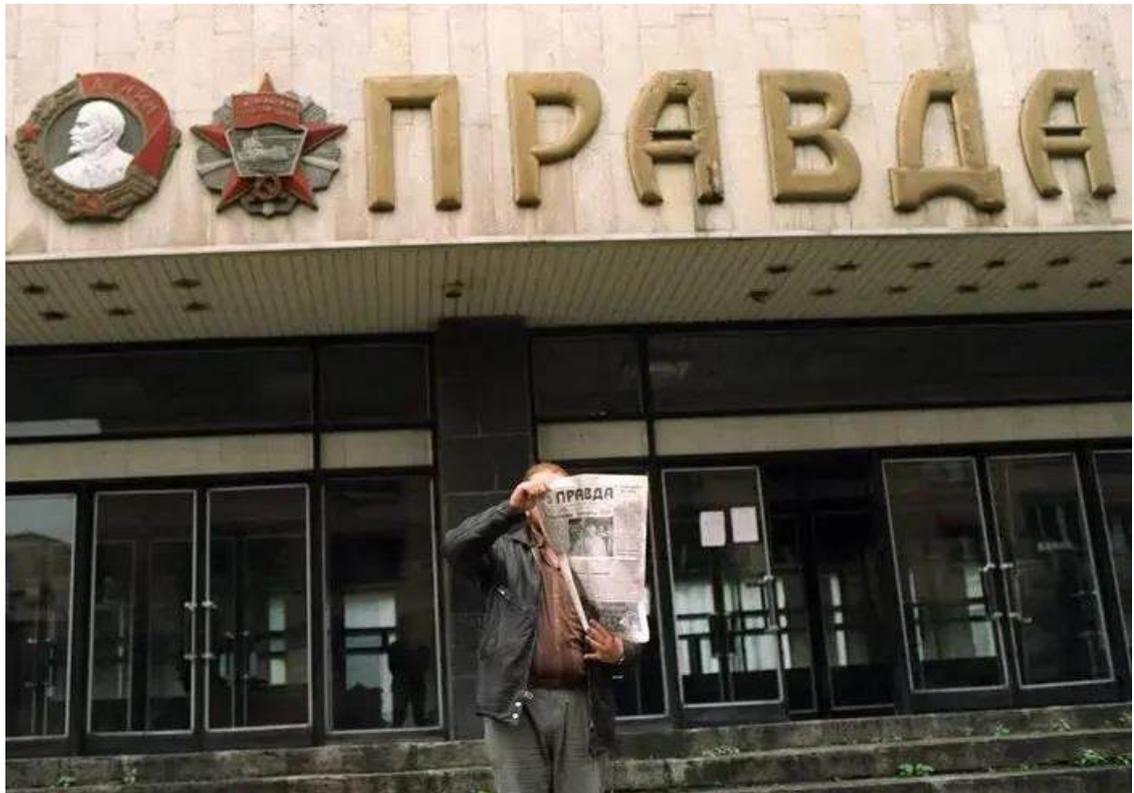


キエフ発——人工衛星や核の対峙（たいじ）が登場する何十年も前から、ソ連は武器を使わない戦争の技法をすでに習得していた。1945年から崩壊するまでの間、ソ連はプロパガンダと虚偽情報（ディスインフォメーション）を駆使し、自らのイデオロギーを宣伝するとともに、敵対勢力を混乱させ、同盟関係を分裂させ、さらには現実そのものを塗り替えてきたのである。

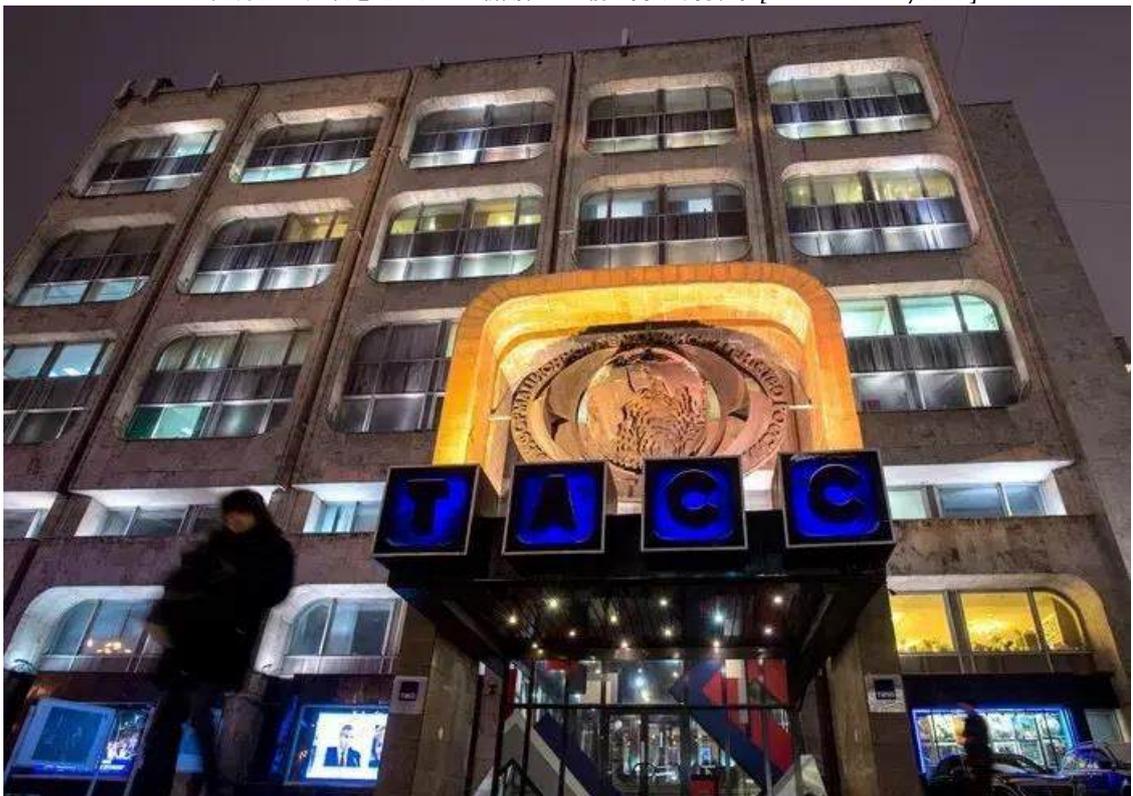
これらの戦術はソ連の国旗とともに消え去ったわけではなく、現代ロシアの国家運営に組み込まれ、新たな野望を達成するための手段として、再利用されているのである。

「これはソ連、そしてロシアにとって伝統的な政策でした」と、ウクライナ第二次大戦歴史国立博物館の副館長ドミトリー・ガイネットディノフ氏は述べた。

「分断して支配する、団結を弱体化させる……ポピュリストによる政権をもたらし、既存の物語（ナラティブ）を揺さぶる。こうした手法は今日においても依然として有効です」と、彼は『Global Watch』に語った。



1991年8月28日、紙をモスクワの新聞社ビル前で掲げる男性。[Gerard Fouet/AFP]



2015年1月23日、モスクワにあるロシア国営通信社タスのビルが見える。[ドミトリー・セレビャコフ/AFP]

この戦略は冷戦から始まったものではない。その起源は数十年前、ウラジーミル・レーニンの時代にさかのぼる。彼は「情報の支配は領土の支配と同等に重要である」と述べている。ソ連の影響工作はやがて成熟し、国営ラジオから偽造文書に至るあらゆる媒体を巧みに利用して人々の意識を操作しようとする世界的な取り組みへと発展していった。

今日、あの同じ手法が、ソーシャルメディアのフィードやコメント欄に響き渡っている。メッセージは依然として政治的である。メディアはすでにデジタルで

ある。そして使命——操作する、誤導する、攪乱（かくらん）させる——は維持されたままである。

虚偽情報（ディスインフォメーション）が常套手段に

冷戦時代、KGB（ソ連国家保安委員会）はソ連の虚偽情報（ディスインフォメーション）工作を主導していた。その内部には「A課」と呼ばれる部署があり、プロパガンダによる心理戦を担当していたが、その目的は説得ではなく、むしろ敵対勢力を混乱・攪乱（かくらん）させることにあった。

「まさにそこに、プロパガンダ機関の中樞が集約されていたのです」と、ウクライナ国立科学アカデミー所属の歴史学者で政治分析家のパヴロ・ハインジフニク氏は『Global Watch』に語った。

「彼らはあらゆるものを支配し、メッセージを微調整するために使用されるべきテンプレートを提供していたのです。」

ソ連のプロパガンダネットワークは、タス通信やモスクワ放送といった公式メディアだけでなく、擬似科学的な出版物や文化センター、いわゆる友好協会などを通じて展開された。その狙いは、西側諸国の世論にソ連の主張を浸透させ、民主主義の制度への信頼をすり減らすことだった。

「あらゆる国にはソ連のイデオロギーを広めるための二国間友好協会が存在していました。現在、ロシアは『ロシアハウス』や類似の機関を使ってその目的を達成しようとしています」と、ガイネットディノフ氏は述べた。

欺瞞（ぎまん）こそが戦略だった

「ノボスチ（Novosti）のモスクワ本部には、虚偽情報工作に専従で取り組む50人のKGB職員から成る部署が存在していた」と、歴史学者のカルダー・ウォルトン氏は2022年、『テキサス国家安全保障レビュー』に寄稿した論文で書いている。これは、1985年にウィリアム・ケーシー米中央情報局（CIA）長官がダラス世界問題評議会で行った演説を彼が要約したものである。

KGBが展開した虚偽情報の中で最も悪名高いものの一つに、米中央情報局（CIA）の研究施設がエイズを人工的に作り出したとする捏造（ねつぞう）された主張がある。この噂はまずインドの新聞に掲載され、その後、ソ連および西側諸国のメディアを通じて広まりを見せた。専門家によれば、この情報工作の狙いは、科学への信頼とアメリカに対する信頼を揺さぶることにあったという。

「彼らは、これはCIAの特殊作戦によるものだ、生物兵器だという主張を広め始めた。そして、それは効果があった」と、ウクライナ社会開発センターの政治・法務プログラム部門責任者であるイホル・レイテロヴィッチ氏は『Global Watch』に語った。

第3世界を狙う第3の戦線

NATOへの工作活動と並行して、ソ連は発展途上国に対してもプロパガンダと秘密裏の支援を展開した。モスクワ放送は数十の言語で放送を行い、アジアやアフリカ、ラテンアメリカでの解放運動を後押しし、ソ連を「抑圧された諸国の自然な同盟者」と位置付けたのである。

「プロパガンダにおいて、ソ連は“最も平和を愛する国”だと自認していた。だが一方で、『他国は我々を征服しようとしているから、我々は武装しなければならない』とも主張していた」と、ハイニジニク氏は述べた。

反植民地主義のスローガンの裏で、モスクワは自らの影響下にある運動や政権に対して武器や軍事教官、イデオロギー教育を提供していた。

「かつてはソ連の軍人がいた。今はワーグナー（Wagner）が存在する。名前は変わっても、中身は変わっていない」と、ハイ＝ニジニク氏は述べた。これはウクライナやアフリカでクレムリンのために戦った傭兵部隊を指している。

情報網としてのエージェントたち

「冷戦時代以来、クレムリンのプロパガンダの核となる部分に変わりはない。変わったのは規模と提示方法だけだ」と、レイテロヴィッチ氏は述べた。

「冷戦期において最も重要だったのはラジオではなく、世論を形成する人々のネットワークを作り上げることでした。表面上は独立しているように見せていたものの、彼らは事実上、クレムリンの主張を繰り返していたのです」と、彼は説明した。

今日でも、その役割の担当者は、異なる名称で存在している。ドイツでは、彼らはしばしば（プーチン（ロシア大統領）の理解者）と呼ばれている、とレイテロヴィッチ氏は指摘している。

ロシアは研究者や活動家、インフルエンサーといった個人を利用して、独立した意見であるかのように見せながら、国家が承認した主張を広めている。

「そのような人物を通じて主張を広めるのは非常に簡単です」と彼は述べた。

新たな形、古い目的

今日のツールは新しいもの--TikTok、テレグラム、トロールファーム--かもしれないが、クレムリンの目標は変わらず、疑念を植え付け、混乱を広め、信頼を損なうことだと、アナリストたちは指摘している。

「目的は自分たちの主張が正しいことを証明することではなく、嘘を混ぜ込んですぐにスキャンダルを引き起こし、相手に反論や証拠の提示を迫ることにあるのです」と、レイテロヴィッチ氏は述べた。

デジタル情報の洪水時代において、その結果として生じるのは混乱である。

「彼らはあまりにも多くの馬鹿げた主張を広めているため、一般の人々はただ情報の沼に溺れてしまっているのです」と彼は述べた。

これらの情報工作は、ソ連時代のイデオロギーに基づく戦略に根ざしたものだ。かつて虚偽情報の専門家を育成していた大学は今も運営されており、現代の情報キャンペーンを主導する多くの人物はソ連時代の教育を受けている。

「変わったのは規模だけです」と、レイテロヴィッチ氏は述べた。

歴史学者たちによれば、これらの戦術は消え去ったわけではない。進化しただけだという。

一方で、その本質は変わっていない。虚偽情報（ディスインフォメーション）の目的は、麻痺させることにあるのだ。

その狙いは、人々の意思と理解力を弱めることにある。専門家たちは指摘する冷戦時代の教訓は今なお有効であり、それに対抗する手段は情報の透明性、教育、そして強靱（きょうじん）な民主主義制度であると。